新
農業経営者
ルポ

第170回

# 俵死すとも品種は死せず

俵農場
## 俵 正彦　長崎県雲仙市

たわら・まさひこ　1954年、長崎県西郷村（現・雲仙市）生まれ。長崎県立島原農業高等学校卒業。1974年、㈱農業研修生派米協会（現・(公社)国際農業者交流協会）の研修生（9期）として渡米。1980年代半ばから農業経営の傍ら、突然変異による馬鈴薯の育種を志し、「タワラムラサキ」など計10点の品種登録を実現（注：長女名義の5品種を含む）。その功績が評価され、2010年、農林水産省の普及事業の一環で行なわれた「農業技術の匠」に選定される。2018年6月28日、63歳で死去した。座右の銘は「天知る、地知る、我知る、人知る」

**公的機関や民間企業ではなく、個人が育種することはどの品目でも皆無に等しい。国内の馬鈴薯に限っていえば公的機関が大勢を占め、明治・大正の時代に海外から導入された男爵薯とメークインがいまだに君臨している。そんななか、突然変異育種法を採用し、個人で10もの品種を登録した人物が長崎県にいた。さらに、5点を申請していたが、これは登録に至らなかった。俵正彦その人は6月下旬、63歳で生涯を閉じた。しかし、往年の覆面レスラー「デストロイヤー」の異名を持つ「グラウンド ペチカ」をはじめとする彼の育成品種は、これからも日本各地で生き続けていくだろう。**

文／永井佳史、絵／俵圭亮、写真提供／俵正彦

### 小4から一家の大黒柱

2017年3月、半年ぶり二度目の対面となる俵は突然、ある歌謡曲の一節を高らかに歌い上げた。内容は、自分にとって嫌なことや不都合なことは振り払わなければならないというものだった。己の信条に合致しているのかと思いきや、歌詞に対する批判が始まった。

「前に進みよる人間がな、そんなことで立ち止まっちゃならん」

要は、真正面から受け止めながら前進しろということだった。

俵は、馬鈴薯の育種で結果を残した。一方、ビジネスで成功を収めたとは言いがたかったが、小さいころから数々の困難に立ち向かい、それこそ身に降る火の粉を物ともせずに状況の打開に努めて余りある行動を起こしてきた。

俵家の出自は足利の落人で、九州に逃げ延びてから代々の当主は地頭（領主）として生活に不自由することはなかったという。農業に首を突っ込んだのは俵の父の正康が初めてだった。

米海軍が佐世保基地に駐留すると地域でいち早く馬鈴薯の生産を手がけて出荷したほか、耕耘機のメリーティラーを購入して実演するなど、名士として通っていた。発想力があり、馬鈴薯のマルチ栽培やハウス栽培を率先して取り入れたのも正康だった。島原半島北部で標高も250mに位置するとなれば出荷時期で南部の産地にかなわないが、それを先回りする方法として前進栽培を編み出した。ところが、仕事にはほとんど取り組まず、本業の製材所の経営も同様で、カネさえあれば地元の議会に貸し出したりしていた。

「お袋と婆がしょっちゅう泣いとっ



圭亮が東京藝術大学に入学した2015年、41歳以下の若手芸術家を対象にした国立新美術館の第89回国展で展示された、俵の顔をモチーフにした油絵。タイトルは「白の百姓」。最年少での選出だった。

# 俵死すとも品種は死せず

た。じじん（祖父）も鎌一つ研げない人やった。よそは4人そろってちゃんと仕事するんやけど、女だけじゃできんけん。それで小学校3年のときに農業をすると決めた」

この時期に将来をテーマに作文を書いている。担任に褒められるのとは対照的に、祖父に家族の前でこっぴどく叱られた経験が少なからず関与した。アメリカで羊の牧場などと夢を語っているようでは家が潰れるぞという戒めだった。俵は5人兄弟の長男でもあった。これを機に小学校4年にして鍬を握っている。

人生の進路を方向づける意味では、小学校4年の国語の教科書で取り上げられていた和井内貞行に感化された。和井内は私財を投じ、魚が棲んでいなかった十和田湖にヒメマスの稚魚を放流し、幾度となく失敗しながらも養殖事業を成功させる。観光業への貢献も多大なるものがあった。個人的に儲けるのではなく、そこにかかわる人たちにも利益を享受してもらう考え方を学んだ。

俵少年は、当初から大人を上回る農作業をこなし、学問では岩石や鉱物に関する書籍を読み漁った。その活躍ぶりは母や祖母を安心させ、次第に笑顔がこぼれるようになる。それから農業高校に進学しようとするのだが、またしても正康が俵の前に立ちはだかった。

果樹の栽培ノウハウもないのに巨峰の苗を10ａ分購入してきたのだ。いつものごとく何をするでもなければ、雑草がはびこり、樹も枯れる。お前が高校に行ったら誰が仕事するんだという常軌を逸した怒号が飛ぶが、入学には無事こぎ着けた。

農作物の生育は待ってくれない。そもそも俵が動かなくては生計を立てられない。高校卒業までは作付面積を3haで維持したものの、それとて帰宅後と週末だけでは手に負えなくなる。一例を挙げると、漬物用のダイコンを登校前に10ａ分引き抜いておき、首切りと袋詰めは母と祖母に任せ、帰宅したら回収して集荷業者に受け渡すまでを対応した。周年では酪農があり、それと並行して農作業に勤しんだ。

その後、２０００年に入り、正康が病床に伏せる。俵にとって良くも悪くもいろんなことがあったが、上述の歌謡曲のとおり、逃げずに食らいついていった。こんな親父でなければいまの自分はないと思える強心臓はこうして作られた。

## アメリカから日本への成型ポテトチップの原料供給が俵のサインに委ねられる

１９７４年、高校を卒業した俵は、㈱農業研修生派米協会（現・（公社）国際農業者交流協会）の研修生の9期生として渡米した。諫早干拓での大規模農業を夢見ての旅立ちだった。6カ月の学課研修と1年半の農場実習があり、後者ではアイダホ州の農場に派遣される。最後は２４０haに及ぶポテト畑の管理を託されるまでになった。

ここでもさまざまな試練にさらされたが、絶対に逃げず、困っている人がいれば協力した。いくつか聞いたエピソードから意外な展開につながったものを紹介したい。

帰国が間近に迫ったある日、白人のスタッフが車両の運転操作を誤り、タイヤを宙ぶらりんの状態にしてしまう。ボス（親分）が車体の下に潜って対処するも解決しない。いら立ちが募るなか、しばらく様子を見て意図を汲み取った俵は、彼の指示より前に必要な工具を差し出したりしてサポートした。

１９７０年代半ばといえば、日本のポテトチップ業界の黎明期に当たる。国内の菓子メーカー数社が成型ポテトチップ用のポテトフレークを買いつけようと同州に乗り込んでいた。ボスは同州のポテト関係の重鎮でもあり、事故対応の件で俵を信頼した彼はお前がここに残ってサインしろと勧めてくれた。

だが、俵はこの提案を断る。弟たちの学費を工面していかなければならなかったからだ。ボスには到底飲み込めず、チャンスなんだぞ、自分の人生ではないかと誘うも、俵が首を縦に振ることはなかった。研修がその域を越え、現地人に雇用したいとまで思わせる働きをMasahiko Tawaraは示したのだった。

## 突然変異による育種に目覚める

１９７６年、長崎に戻った俵は、売り上げの増加には規模拡大が近道と考えたが、当時の農家は全般的に潤っており、農地を広げようにもなかなか表に出てこなかった。荒れ地の開墾や辺鄙な場所、土壌病害に侵された圃場をかき集めたほか、熊本や大分で出作りすることで、最終的には延べ40ha強に達する。周囲が2haくらいで回しているところをその10倍だ。長崎のほうは小区画ゆえに大型機械にも頼れず、綿密にシミュレーションしたうえで、俵個人の労働力と、植え付けや収穫期の臨時雇用で面積をこなした。

１９８０年からは生活協同組合と取引を始める。それまでは慣行栽培を志向しており、「きれい」「おいしい」「貯蔵に利く」といったごく当たり前のことを意識して馬鈴薯を生産していた。

１９８２年、熊本は阿蘇で２haの草原を借り、処女地のため、土壌消毒を実施せずに無農薬でデジマという品種を栽培した。緑のじゅうたんに真っ白い花の帯――。視察した生協の職員が感激した。それを食べた消費者からこんな手紙が届いた。

「俵さんのような安全なものが食べたかった」

安全とは農薬を極力使っていないことを指す。府県の馬鈴薯の産地では、過作でそうか病や青枯病といった土壌病害に悩まされており、土壌消毒を済ませてから作付けするケースがいまも少なくない。その土壌消毒で俵は事故を体験していた。

とはいえ、唐突に無農薬に切り替えて病気が収まるのであれば、皆そうしている。長年農薬に依存してきた俵の長崎の圃場では土壌消毒をやめると次々と魔の手が襲ってきた。

何か手立てはないものかと検討した末に行き着いたのが品種の力による克服だった。それも交配ではなく、突然変異だった。文献を調べたところ、どれも冒頭に突然変異についての記載があり、アメリカのラセット・バーバンクをはじめ、日本が海外から導入した男爵薯やメークインが突然変異で生まれた品種だと認識したことによる。

俵の突然変異一号である「タワラムラサキ」をめぐっては自らの情報収集が役立つ。暖地二期作向け馬鈴薯の育種を担う長崎県総合農林試験場愛野馬鈴薯支場（現・長崎県農林技術開発センター農産園芸研究部門馬鈴薯研究室）に出入りしており、品種特性を把握したうえで圃場の病害発生リスクに応じた作り分けをしていたのだ。消費者、生産者双方のために土壌消毒の回避を念頭に置き、青枯病とそうか病に抵抗性を有する品種を育成しようとした際、頭にあったのがチヂワであり、その後継品種のメイホウだった。

メイホウの母親に当たるチヂワは、暖地二期作品種ではでん粉価が高く食味は良好で、青枯病に強い特徴を備えていた。収穫時にストロンの先が腐る症状などを抱えていたことから普及せずに消えていった品種だが、俵は通常より早めに掘り取ることで免れる術を会得していた。後継品種のメイホウもこの尻腐れ問題を払拭できずにいたため、交配では無理なのだろうと解釈したのも突然変異育種法を選んだポイントだった。

そういった経緯を踏まえた１９８０年代半ば、尻腐れ症状のないメイホウを発見し、優性遺伝で異常がなかったものの栽培を繰り返した。その際、２ha、じつに12万株から収穫された塊茎をチェックしていると、表皮に紫色の線が入った個体をたった一つ発見する。それを次の秋作で種イモとして植え付けると皮色が白いものに戻り、翌春にはまた紫色の帯が現れるという具合に変化した。以後、皮色に着目しながら青枯病やそうか病の汚染圃場で選抜を繰り返し、15作の歳月をかけて固定させたのが皮色がほぼ全体に赤紫の「タワラムラサキ」だった。１９９３年に出願し、１９９７年に品種登録に至っている。

俵の育種熱は冷めず、品種登録は10にも上った。減農薬栽培が可能なことに加え、少肥栽培下でも多収なことが共通した特色になっている。





熊本は阿蘇での委託栽培の様子。北海道のタバタ製円盤型ポテトプランターを使用している。ポテトハーベスターは同じく北海道の東洋農機製を導入していた。

**【俵の育成（出願）品種一覧】**

①タワラムラサキ（１９９３年に出願、１９９７年に品種登録）
②タワラヨーデル（１９９６年に出願、２０００年に品種登録）
③タワラマガタマ（同）
④グラウンドペチカ（同）
⑤サユミムラサキ（同）
⑥タワラアルタイル彦星（長女の俵直子名義で２００５年に出願、２００８年に品種登録）
⑦タワラ小判（同）
⑧タワラ長右衛門宇内（同）
⑨タワラポラリス北極星（同）

# 俵死すとも品種は死せず

⑩タワラマゼラン（同）
⑪タワラビーナス（2012年に出願、品種登録に至らず）
⑫タワラ ワイス（同）
⑬徳重ヨーデルワイス（同）
⑭クワタルパン（同）
⑮朱美呼ヴェガ織姫（2013年に出願、品種登録に至らず）

「突然変異はな、一遍には出てこんのよ。葉っぱに出てきたり、花に出てきたり、もちろんイモに出てきたり。最初はイモに出てきたのが一番わかりやすかった。1本の茎で葉っぱが3種類出てきたのもあったな。よよいとびっくりした。

最初はみんな同じなんよ。ほんとちょっと違うくらい。自分にはその違いがわかっても、ほかの人には誰もわからない。出てきても見つけられる人がいない。でも、俺にはわかる。ジャガは自分の子どもじゃけん。それくらいジャガに目が向いている。そんなのを繰り返していると、葉っぱも花も違う完璧な個性が出てくるんよ。そうしてできたジャガを『環境適応型』と呼んでいる。

突然変異を見つけたときはな、ほんとはそれを見て見ぬふりをしたい。カネにもならんものを何十作もまた苦労すると思うとな。でも、俺は自分のためじゃなく、日本国の消費者のためにやっている。そう思うとやめられない。

品種で儲ける気はないんよ。第一、自分で品種を作ったとは思っていない。『与りました』としたいくらい。人間の子どもも一緒で、天から授かったもんよ」

1994年から生協を中心にタワラムラサキ150tの販売を始め、2000年からはアンデス赤の突然変異の「タワラヨーデル」や、レッドムーンの突然変異で、往年の覆面レスラー「デストロイヤー」の異名を持つ「グラウンド ペチカ」も含め、東京や愛知、大阪のスーパーマーケットへの供給が500～600tに拡大する。経済的にも余裕が出る



品種登録に直接出願しなかった品種。「タワラマゼラン」の突然変異で白系統の「グラウンド ペチカ」が出てきた。この品種から「タワラポラリス北極星」が誕生した。




品種登録に至らなかった「タワラ ワイス」



品種登録に出願しなかった品種で、塊茎の色が黄色と赤に真っ二つに分かれている。



▶「タワラヨーデル」の花色は赤だが、そこに白いものが発生した。その株を掘り出すと塊茎が赤と紫というように2色で混ざっていた。

▼2011年春作の「タワラマゼラン」の原種圃場。この品種は、レッドムーンから「グラウンドペチカ」、さらにその突然変異を固定させたものになる。



ようになったが、立て続けの身内の不幸を境に過酷な局面に突入していく。

## 庄屋は小作人の息子を褒めない

２００６年のことだった。母が脳出血で他界した1カ月後、妻のさゆみがくも膜下出血で倒れ、そのまま帰らぬ人となった。俵の3人の娘は社会や県外の大学に進んでいたが、年齢の離れた長男の圭亮はまだ小学5年生だった。

さゆみは販売の窓口だったこともあり、業務に支障を来した。ただ、それ以前から経営は下降線をたどっており、子どもたちの学費などを捻出するため、山や畑、トラクター、コンバインを売却してなんとか凌いでいた。原因は俵自身になかったこともないだろうが、他者に起因したことも大いにあったという。後者に関しては事実関係を確認できなかったため、掲載を差し控えるものの、俵は次のように表現していた。

「庄屋と小作人の息子がいるとするよね。日本は変な国でね、小作人の息子が庄屋の息子より勉強できて走るのが速くても、庄屋は小作人の息子を褒めない。小作人の息子が邪魔になってくる。そういう考えなんよ。俺には無視の次に邪魔、最後は妨害があったよ。でも、人生ってそんなもんよ」

計画どおりに行けば、県外で自らの品種を普及・指導したり、加工食品メーカーに原料を供給していたはずだった。また、俵と同じように後に派米研修に参加し、渡米前に予備知識を得るために3カ月ほど寝食を共にした2人を招き寄せての経営発展構想も潰えた。

２０１０年には、農林水産省から育種が評価され、「農業技術の匠」に選定されるも、事態が好転するわけではなかった。

他方、俵の実績が海外に知られるところとなり、中東やヨーロッパの3カ国で品種改良を要請されたりしたが、これも種々の理由で話が立ち消えになってしまった。

そんなとき、俵をそばで見守っていたのが同居していた圭亮だった。現在、東京藝術大学絵画科油画専攻4年の彼は、幼少のころから絵の才能にあふれ、周囲を虜にしていた。俵が落ち込んでいる様子を見ると、言葉ではなく、絵で元気づけるようなメッセージを送ってきたのだという。

「圭亮がいたからどうにかがんばってこられた。こいつには鍬を持っちゃいけないと言ってきた。農家を継ぐんじゃなく、俺のジャガを世に出すのが仕事よ。普通の農家は段ボールとかチラシを外部に発注する。でも、圭亮が有名になればなるほど段ボールであっても価値が出てくる。俵が作ったジャガもおもしろいんやけど、息子の圭亮がデザインしたこの箱もすごいと思われたらこっちのもんよ。

俺の役目はもう終わった。15品種もできた（注：実際は10品種。5品種は品種登録に至らず）。自分に運がなくても、子どもたちに行けばいい。それが日本国の将来のためになればな」

筆者は、ここまでの話を２０１６年10月と２０１７年3月の都合4日間で聞き、俵が亡くなる当月の6月に最後の取材に臨もうとアポイントメントを入れた。一度は承諾してくれたが、後日、断りの電話があった。病で衰えた自分の姿をさらしたくないとする男の美学ではなかったのかと考えている。

## 親の品種を子が広める

品種登録に至った10品種はいずれも育成者権がすでに消滅し、国の品種になっている。男爵薯やメークインなどとともに、種イモが栽培されれば、今後も一般栽培が可能で、消費者に食べてもらうこともできる。筆者が調査したところ、「タワラムラサキ」「タワラヨーデル」「グラウンド ペチカ」の3品種は、種イモの生産がこれからも半永久的に継続されることがわかっている（注：自家採種であればいつまでも栽培できるが、ウイルス病に罹病して収量が減少する。健全・無病な正規の種イモを用いた栽培が求められる）。こうして俵の育成品種が日本のどこか





2013年、俵はオマーンからの要請で同国を訪れた。農林水産省の許可を取り、「タワラマゼラン」を持ち込んだ。

# 俵死すとも品種は死せず

で栽培されることは彼にとっての本望だろう。

そして、もう一つ忘れてはならないことがある。俵の子どもたちによる品種の継承だ。圭亮は言う。

「父は突然変異の『異』に『緯』という字を当てていました。これは、突然変異の成り立ちを考えた父の解釈を言葉にしたものです。緯という漢字のごとく、物事にはいきさつがあるように、父は人や時代や環境に動かされ、またそのなかでもがきながら私たちを育て上げ、人生を駆け抜けました。これからはバトンタッチを受けた私たち子どもの時代になります。

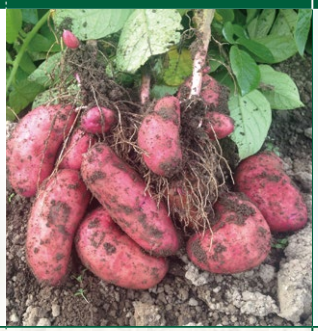
父は自分が作った品種を『お前たちと一緒の子ども』と表現していました。1人でいくつもの有用な突然変緯を見つけ、生まれた父の子どもたち、つまり馬鈴薯の育成品種はいま、学生である私と一緒の段階にあると思います。

俵の名前を継ぐ20代目として、2000年代を生きていく者として、父の馬鈴薯を世に広めていく仕事に励み、社会に貢献していきたいと考えています」

品種名の大半にある名字の俵を冠した「タワラ」シリーズの第二章の幕がまさに開こうとしている。

（文中敬称略）

**村上農場（北海道上士幌町）による品種特性の評価**

| | アンデス赤 | タワラヨーデル | レッドムーン | グラウンド ペチカ |
|---|---|---|---|---|
| |  |  |  |  |
| 生育及び疫病への強さ | 多肥だと繁茂し、倒伏しやすい。その場合、疫病や軟腐病になりやすい。 | アンデス赤より疫病、軟腐病ともに強い傾向がある。 | 茎葉の生育が非常に旺盛なため、多肥だと繁茂し、疫病や軟腐病などになりやすい。開花期を過ぎると急激に勢いが弱まる。適正施肥ができた場合、疫病にはやや強いと感じる。 | レッドムーンより生育が旺盛。適正施肥ができた場合、レッドムーンより疫病に若干強い傾向がある。ただし、両品種に通じることは他品種にはない独特の腐敗の仕方をする。見た目は健全でも、触るとつぶれる症状が見受けられる。 |
| そうか病への強さ | 普通だが、軽い隆起型の症状が多い。 | アンデス赤とほぼ同じかやや強い。 | 弱い。とくに陥没する症状が多い。 | レッドムーンと同じ。 |
| 収量 | 茎葉を生育後期まで保てればある程度の収量が望める。早期に枯れてしまうと小粒が多い。中心空洞が非常に多いため、多肥は避ける。 | アンデス赤とほぼ同じだが、株間を広くすることでアンデス赤より高収量になる。若干の中心空洞あり。 | 倒伏させない施肥と茎葉の勢いを生育後期まで保てれば極多収になる。 | レッドムーンより茎葉の勢いが強く、多収傾向。 |
| 食味 | 新じゃが期は両方とも高でん粉だが、タワラヨーデルはアンデス赤に比べ皮が薄く、形状が細楕円である。表皮から中心部までの距離が短いため、蒸かすと火が通りやすい。ただし、逆に亀裂以上に実が割れてしまうデリケートな一面を抱えている。また、アンデス赤より長期にわたって粉質感が楽しめ、ミネラル感のある野生的な香りや味わいも特徴だといえる。<br><br>**【貯蔵による熟成の仕上がり】**<br>タワラヨーデルはアンデス赤に比べ、熟成速度がやや遅いが、それぞれ高糖度な仕上がりになる。完熟のピーク時にはアンデス赤に強い粘りが出るのに対し、タワラヨーデルは粘りがあっても締まり（結着感）が見られず、水分が上がりやすいことから柔らかい印象がある。タワラヨーデルの熟成後は、細楕円の形状や水分の関係もあり、選果や輸送の際に先端部分がぶつかって傷みやすく、そこにカビが付きやすい。そのため、歩留まりがあまり良くなく、保管に注意しなければならない。 | | 新じゃが期はでん粉価や食味、煮崩れなどに大きな違いはないが、グラウンド ペチカはやや肉質が固めな印象がある。<br><br>**【貯蔵による熟成の仕上がり】**<br>レッドムーンは糖化や粘化などの熟成の変化が緩やかで、熟成初期より2カ月ほどかけて食味のピークへ徐々に上り詰めるのに対し、グラウンド ペチカは熟成が2週間ほどで一気に加速し、完熟に達する。まれに糖度が上がらない年もあれば、極甘に仕上がる年もあり、ピークの期間もそれほど長くない。ばらつきのある品種といえる。ただし、糖度の上がる年には、グラウンド ペチカのほうが高糖度に仕上がる。また、レッドムーンに比べ、熟成期を過ぎるとやや水分が上がりやすい特徴もある。 | |

注：北海道上士幌町の村上農場は、経営面積が45haであり、うち12haで19品種の馬鈴薯を生産している。上記4品種の栽培経験が長く、品種特性を公平に分析してもらううえで適正と判断してその評価を依頼した。食味は販売担当である村上智華氏に、それ以外は農場長の村上知之氏が対応している。なお、同農場のことは2016年10月号の本稿で取り上げた。